

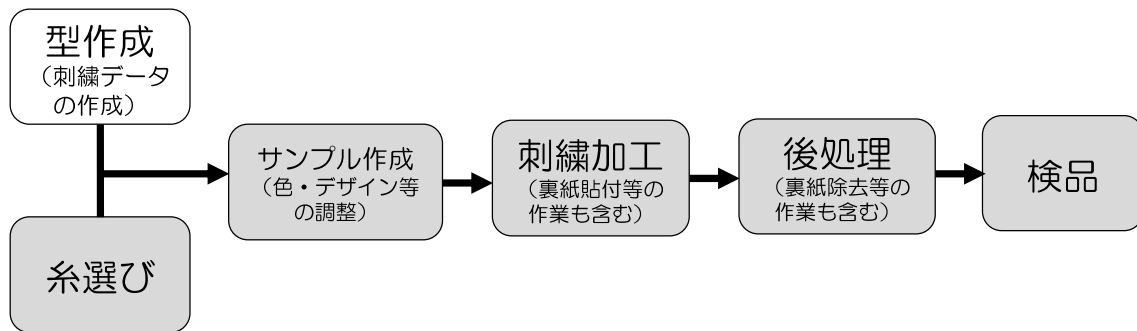
「キレイな」刺繍ができるまで

タオル専用の刺繍加工業を営む城東刺繍では、図1のような工程をへて刺繍加工をおこなう。まず、受注時にはタオルメーカーなどの受注先から紋様や文字などの図案が送られてくるが、この図案を刺繍するためのデータに置き換える。これを型作成（パンチング作成）という。城東刺繍では型作成のみ外注しており、今治市内にある（有）村上パンチに依頼している。創業当時は名古屋方面まで外注していた。



型をコンピュータに読み込ませ、
自動で刺繍加工する

図1 刺繍加工の工程




ほぼ同じタイミングで、図案に沿って糸を選ぶ。この糸選びには長年の経験と勘が要る。無限に近い多様な色の糸のなかから、図案に合わせてひとつずつ選び出す。糸は、洗濯に強い光沢のあるレーヨン糸が主流であり、たまにポリエステル糸も使われる。



12基がワンセットになった工業用多頭式刺繍機を使って

大判タオル（タオルケットやビーチタオル等）に刺繍加工している様子

つぎに、サンプルを作成する。受注先の要望どおりに刺繍されているかを確認しながら微調整する。通常、ここまでおよそ1週間かかる。そして、受注先から了承を得て、受注した数のタオルに刺繍加工する。刺繍加工は、ほとんどの場合が小ロットである。城東刺繍では、およそ100枚から受注しているが、時折100枚を切るときもある。

城東刺繍では、創業以来、日本製の工業用多頭式刺繍機を使っている。年に一度、大阪で刺繍機を含めたミシンの展示会があり、桧垣夫妻は、そこにしばしば足を運んで城東刺繍の仕事に合う機械を探した。現在は「TAJIMA」ブランドで有名な（株）TISM  製のものをおもに採用している。12基がワンセットになった工業用多頭式刺繍機はコンピュータが内蔵されており、およそ1千万円の高価な機械である。城東刺繍が創業時に導入した1970年代の刺繍機は、下糸が表に出ないようにする「糸調子」を整える機能を備えた程度のシンプルな構造であったが、現在はコンピュータ化された複雑な構造に変わっており、刺繍機といっても工業用になると相当額の設備投資が必要となる。




ハンカチタオルやフェイスタオルなど
小型のタオルに刺繍加工する様子（左）

ミシンで自動的に刺繍が施されるが、
従業員が常時チェックする（下）

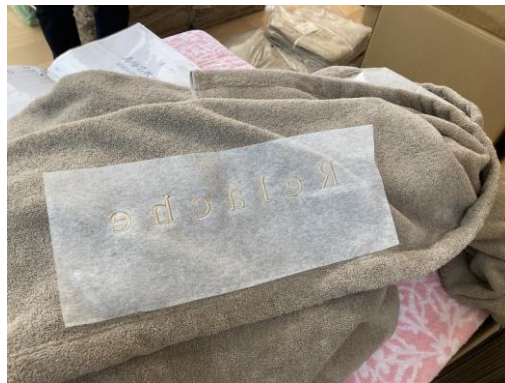


また、機械が変わると職人に求められるスキルも変わり、新たな技術ノウハウを身に付けなければならない。淳三氏は、「何度も繰り返し運転してたら誰でも車を操縦できるようになるでしょ。機械も一緒ですよ」と言うが、時代を経ても刺繍加工は細かな作業の連続であり、目利きと勘が勝負の職人技であることに変わりはない。ただ、コンピュータ化された機械はいちど調子が悪くなると職人技では太刀打ちできない部分があるため、修理はメーカーに依頼している。淳三氏は、趣味の釣りをとおして TISM の営業担当者と懇意にしており、製品のクオリティを左右する機械の不具合が少しでもあるとすぐに修理してもらえるように人的ネットワークを築いている。これも淳三氏の職人技である。

その他にも、日本で初めて多頭式刺繍機を生産した（株）バルダ
ン  製の機械を使っていたこともある。昔は機械のスピードが遅く、現在の5分の1程度のスピードだったため、納期に間に合わすために24時間機械をフル稼働させることも珍しくはなかった。タオルの全生産工程で見ると、刺繍加工は仕上工程でも最後の方に位置し、納期が非常に短くなるケースが多い。タオルメーカーから製品が送られてくる時点で、すでに納期が迫っていることも珍しくない。最後に納期を調整するのも、刺繍加工業者の役目である。

かつては作業工程の調整も複雑で手間がかかったが、現在は糸のメーター数から織り上がりの時間までコンピュータによって計算できる。しかし、今も昔も変わらないのが、最終的な仕上げ作業は人の手が入ることだ。刺繍機の針が折れてタオルに穴を開けてしまうといった機械によるトラブルはなくなったが、機械の性能が数段上がったとしても、最後は目で確認し、細かな色の違いがあれば手で解いて修正を加える。

そして、刺繍加工が終わったら、後処理として刺繍する裏側に貼付していた裏紙（不織布）を1枚1枚取り除く作業をおこなう。裏紙を貼付する目的は、刺繍をキレイに歪みがないように加工するためである。裏紙除去はかなり手間のいる作業



1枚1枚裏紙が貼付されており、
これを手作業で剥がしていく

であり、一般には裏紙が貼付されたまま納品されることが多い。しかし、城東刺繍では裏紙の除去は後処理として仕上工程に入っており、手間を惜しまない。こうして最後に、検品を終えて梱包せずにタオルメーカーなどの受注先に返送される。

納期を死守して多忙な日々を過ごす

1976年の創業以来、城東刺繍では営業をしたことがない。「小さな工場で捌ける量も限られてますけど、本当に運も良かったんでしょね」と淳三氏は言うが、バブル経済崩壊後の不況時でもコロナ禍で経済が一時ストップしたときも、タオルメーカーから「やってくれんやろか」と常時注文が入ってくる。今治にタオル専用の刺繍加工業者が少ないこともあるが、それだけではない。刺繍の技術に一目を置かれているからである。タオルには通常パイルがある。このパイルがタオルの特徴であり、刺繍加工する際には厄介な存在となる。

パイル生地 of 刺繍で留意すべき1つ目の点は、「糸調子」である。糸調子とは下糸が表に出ないことであり、下糸が表に出てしまうと美しい刺繍はできない。2つ目の点は、「色選び」と「色合わせ」である。図案に沿って忠実に刺繍で絵柄を再現するには、色選びと色合わせが決め手となる。受注する図案は、ブランドのロゴマークからキャラクター、文字、イラストなどさまざまであり、図案によっては多色使いの複雑なステッチのものもある。

糸選びは、受注先のタオルメーカーが前もって指定するケースもあるが、多くの場合、城東刺繍で用意した糸の見本帳を渡して選んでもらう。その他にもステッチを入れる場所決めや型の作成、サンプル作成、受注先との擦り合わせなどの細かい作業があり、これらにおよそ1週間を要する。そして、刺繍加工のプロセスで糸を替えたり、状況を見て機械を調整したり、目に見えないところで技が光る。

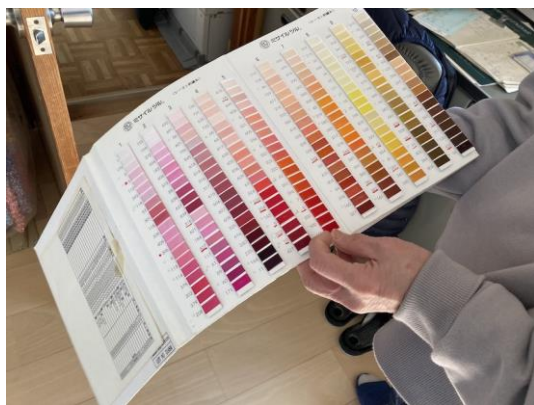
昔と今では、受注する刺繍の大きさに違いがある。昔は大きな刺繍をタオルに施すことが頻繁にあったが、最近は刺繍部分が小さくなった。その代わり受注の数は増えている。しかし、コロナ禍によってスポーツやライブなどの一連のイベントが軒並み中止になった

ため、ここ2年ほど大口の受注が減った。

たまにシャツなどの平地織物の刺繍加工を頼まれるが、針の太さや糸の番手など細かな技術が違うため、クオリティを下げないためにも請け負ってはいない。あくまでタオルに特化した刺繍加工が、城東刺繍のプロとしての誇りであり、差別化である。



工場には無限に近い色のレーヨン系の
サンプルと在庫が置いてある



高い加工技術に加え、城東刺繍が今治のタオル業界で信頼を獲得できたのは納期を死守してきたからである。どんなに短い納期であっても、遅れたことはない。美賀子氏は、「商売を始めて何がしんどかったかと言えば、納期かな。昔は古い機械でスピードも遅いし、人もそんなに雇えないし、納期が間に合わないのは辛かったですね。若かったから夜遅くまでかかっても苦にならなかったですけど、約束の納品時に間に合わないというのはどうしても避けたかったですね」と言う。創業以来、納期との戦いのなかで日々の仕事を重ね、

それを死守することで城東刺繍の確かな仕事ぶりが今治のタオル業界で評価されてきた。

城東刺繍に営業が不必要なのは仕事が途切れないからであるが、上記のような確かな技術と納期の死守とともに、「誠実な商売」をスローガンとする城東刺繍の商売魂が製品にも反映されているからである。淳三氏は「人をだますな！」をモットーにしており、仕事でも遊びでも、何事もずるいことが大嫌いである。その真っ直ぐな姿勢で産地内のタオルメーカーから厚い信頼を寄せられ、営業なしでもつねに仕事が舞い込む。

パイルにはさまざまなバリエーションがあり、短いパイル（左）、長いパイル（右）に合わせて刺繍加工していく



創業当初は二人でスタートしたが、寝ずじまいの毎日がつづき、1年も経たずして3人の従業員を雇用した。それでも昼間は美賀子氏が、夜は淳三氏が機械をフル稼働させて、創業から10年ほどは休みなく働いた。1970年代のブランド名入れタオルのブームや1980年代のバブル経済なども忙しさに輪をかけた。その後も従業員は増え、ここ数十年は10名ほどの体制で対応している。

事業に欠かせない資金繰りは美賀子氏が担当し、堅実な経営をおこなってきた。淳三氏は、「お金の面は全然ぼくは苦労したことないですね。小遣いもらうだけですから。うまいこと嫁さんにやってもらって、ぼくはええ目してます。嫁さんも良かったし、犬も良かったし」と笑う。

猫の手も借りたいほどの多忙な毎日を長年過ごしてきた桧垣夫妻だが、淳三氏は「本当に運が良かった」と城東刺繍の歴史を振り返る。二人に十分な休み時間ができたのは10年ほど前からである。さらに2020年のコロナ禍で少しはゆとりのある働き方ができるようになった。コロナ禍でタオル業界も影響を受け、イベント中止は刺繍加工業にとっても大きな打撃を受けた。コロナ禍以前と比べると受注量は半分の落ち込みである。しかし、コロナ禍で長年働き詰めの二人に、ようやく人並みの時間的余裕ができた。

（次号につづく）

